

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2018年度
氏名	藤江 南月	指導教員 (主査)	丹 明彦

論文題目	大学生におけるストレスへの意味づけと被受容感がストレス反応に与える影響
------	-------------------------------------

本文概要

【問題と目的】 ストレスイベントを乗り越えるための認知的対処に「意味づけ」(Meaning Making)がある。意味づけ研究はその過程に焦点を当てた研究が行われており、量的研究では、反すうに焦点を当て、反すうには性差があること、性差によって反すうから抑うつに至る過程が異なることが示されている(西川・松本・古谷, 2013; 関・兒玉, 2012)。質的研究では、意味づけの過程において他者から「受け入れられた」感覚があることで出来事を肯定的に捉えられるようになると示唆されている(井倉, 2016; 亀田・相良, 2011; 古木・森田, 2008; Neimeyer, 2002)。このことから、意味づけの過程において「受け入れられた」感覚によってストレス反応がどのように変化するか、性差を踏まえた量的な研究を行う必要があると考えられる。本研究では、この「受け入れられた」感覚に「被受容感」を取り上げ検討する。本研究では第一に、意味づけは直接的にだけでなく、被受容感を介してストレス反応に影響を及ぼすというモデルの検討を試みる。第二に、意味づけや被受容感の程度の差の組み合わせによってストレス反応にどのような差が生じるのかについて因果関係を踏まえた検討をする。

【研究方法】 調査対象者 都内私立大学Aの学生 340名(男性 102名, 女性 238名, 平均年齢 19.1歳, $SD=1.2$)
 手続き 質問紙調査を実施 使用尺度 ①被受容感尺度(杉山, 2002) ②青年期のストレスへの意味づけ方尺度(藤津, 2016) ③心理的ストレス反応尺度(以下, SRS-18)(鈴木他, 1997)

【結果と考察】 (1) 男女ごとの相関分析: 相関分析の結果、男女間で関連する変数に違いがみられたため、以降の分析は男女別に行った。(2) 男女ごとのモデル検討: 本研究の仮説を検証するため、意味づけは直接的にも被受容感を媒介しても心理的ストレス反応に影響を与えるモデルを仮定した。多母集団同時分析を用いて男女間でのモデルの比較を行った。仮説モデルの修正を行い、最終的に十分な適合度指標が得られた。(3) 男女別の分散分析: 次に、青年期のストレスへの意味づけ方尺度と被受容感尺度の得点差の組み合わせによって、SRS-18の得点に差があるかを検討するために、青年期のストレスへの意味づけ方尺度と被受容感尺度を独立変数、SRS-18を従属変数とした2要因分散分析を男女別に行った。その結果、女性群においてのみ独立変数が「被受容感」と「人生の目的の明確化」、従属変数が「不機嫌・怒り」の時に交互作用が有意だった。単純主効果の検定の結果、「人生の目的の明確化」が低くとも「被受容感」が高いことで「不機嫌・怒り」得点が低下することが示された。本研究の結果から、以下4点が明らかになった。(1) 男女で意味づけがストレス反応に影響を与えるモデル構造が異なり、男女間で意味づけを行う際の視点が異なることが考えられる。(2) 男女で意味づけが被受容感に与える影響が異なり、男性は周囲との関係の重要性に気づくことが重要だが、女性はそれに加えて今後自分がどのように生きていくかという目的を見出すことによって、改めて自分自身が周囲に支えられ受け入れられると気づくことを促すと考えられる。(3) 男女ともに意味づけは「被受容感」を媒介してストレス反応に影響を与えるが、女性群では特に、「人生の目的の明確化」は「被受容感」を媒介したほうが「無気力」へ与える影響が強い。このことから、意味づけの過程における「被受容感」の効果は男性より女性のほうが強いことが考えられる。(4) 女性群については、意味づけの過程において生じる怒り感情の低下には、他者から支えられ受け入れられている認識と情緒が重要であり、男性群は、意味づけを行うよりも、まず他者から受け入れられ支えられているという認識と情緒があることによってストレス反応が下がる。